「じいちゃんみたいな和牛農家になる」という幼い頃の夢は、いつしか具体的かつ明確に私の中の強い軸となり、今では「仙台牛を世界に広める」という大きな情熱になってこの胸を突き動かしている。祖父母は和牛繁殖と米作りを営む専業農家で、物心ついた時から牛舎は私の遊び場だった。小さな私の背丈を優に超える母牛と、無邪気に駆け回る子牛の姿は、私にとって当時から身近で、愛おしく、時間が経つのも忘れるほど大切な存在だ。

夢の実現のため、第一希望の農業高校に入学してからの日々は、一言では語りきれないほどの専門的知識・技術・体験をすることにつながり、まさに溢れるほどの畜産への思いを多くの人々と共有することができた。授業だけでは飽きたらず、牛部では部長として休むことなく牛の世話を行い、長期休業中は祖父母の農家で繁殖牛の手伝いを、さらにインターン活動で、和牛を 200 頭飼育する大規模肥育畜産農家に泊り込み、実際の管理や出荷などの細やかな点を学ぶ機会を得ることができた。

また、先日畜産ティーンプロジェクトに合格し、全国の高校生代表２０人の１人として、オーストラリアを訪れ、海外の畜産を実際に現地で学ぶという、大変貴重な体験に参加することができた。仲間より、全国各地の畜産の現状や工夫を知り、さらにオーストラリアでは、日本で考えられないほど大規模な畜産を目の当たりにすることで、大きな気づきを得ることができた。

その１つが衛生管理における環境の良さで、日本の約９割が舎飼いという飼育環境であるのに対し、オーストラリアでは日本の 88 倍という広大な農地を活かした放牧飼育環境がメジャーであることだ。放牧飼育は日本でも行われ、近年アニマルウェルフェアという観点からも優れた取り組みであることは知っていたが、オーストラリアの放牧はその想像を超えていた。自由に牧場を駆け巡り、好きなタイミングで牧草を食べる、制限された狭い牛舎では成し得ない、まさに伸び伸びした環境で、ストレスを軽減できるという。しかしあまりに広大な規模の放牧は、私の目指す飼育方法とは異なっていると感じた。日本の畜産の優れている点は、一頭一頭の性格や健康状態までも細やかに管理できることであり、水・餌もかなり工夫されているのはもちろん、除糞なども当たり前に行われることで最高の衛生環境を整えることができることだ。祖父母も早朝に起床し、全ての牛に触れながら声をかけ、世話をしつつ、除糞で見えない体内環境にも気づけるように配慮している。日本は人工授精で交配する方法のため、発情期もより早急に確認でき、高確率で繁殖することが可能となっている。さらに、ある程度の運動環境の制限を行いながらも、質の高い給餌を行うことや良い繁殖環境を整えることで、世界でも稀にみる霜降りの美味しい牛肉の生産という最高の畜産技術にも結び付いていると考える。

残念なことに、日本は少子高齢化の深刻化と、農業人口の減少・高齢化は否めない。その理由として経済負担も大きく、新規就農だけでなく、後継者として経営を続ける場合でも、多額な設備投資や、自然災害等の保障などにも実際不安がある。それでも、農業は人間の食を支える重要な職業であり、取り分け国産牛肉は、質の高さと高級というイメージから、特別・ご褒美という視点も根強く、畜産への関心が高まっていると聞く。

私はこれから大学で畜産業を営むための経営を学び、その後は祖父母から継承した農業環境を拡大しながら、仙台牛を日本一にし、その消費を世界に拡大したいと考える。AI 技術も駆使しながら、一千頭の大規模和牛畜産家として、将来は持続可能な畜産技術を提案していきたい。幼き頃からの私の夢は大きく、現実に近づきつつあるが、現実の課題から多くの人が不可能と難色を示すのも事実だ。だからこそ私が夢を叶え、不可能を可能にすることで農業人口増加に貢献したい。これが私の夢への挑戦だ。